



南葵音楽文庫ミニレクチャー

父・徳川頼倫のこと～頼貞の回想から

林 淑 姫

2018年9月1日(土) 11:00

南葵音楽文庫閲覧室(和歌山県立図書館内)

南葵音楽文庫

和歌山県立図書館内

和歌山市西高松 1-7-38

tel.073-436-9500

父と子

徳川頼倫と頼貞はどのような父子であっただろうか。早くから両親のもとを離れて育った頼貞にとって、父はいつも、亡くなったあとでもなお、遙か前を歩いている。父と比較されがちな子の悩みもあったろう。しかし父は息子の人生を支え、子もまた父の生き方をよく理解していた。世代間の葛藤というものにはここにはみられない。ともに激動の20世紀日本を生き抜くものとしての共感があるのみである。

頼倫は1872(明治5)年、田安德川家8代当主徳川慶頼の6男として東京に生まれた。兄に徳川宗家を継いだ家達(いえさと 1863-1940)、田安家を継いだ達孝(さとたか 1865-1941)がいる。8歳のとき、紀州徳川家14代当主徳川茂承の養嗣子に迎えられ、1890(明治23)年9月、18歳で茂承長女久子と結婚、2年後に長男頼貞をもうけた。1896(明治29)年3月、24歳の誕生日を前にして英国での修学のため出立。翌年11月、欧米各国の視察の旅を終えて帰国した。滞英1年目の秋、3男治が誕生している。旅行の間に図書館の設置を構想し、帰国後まもなく邸内に「南葵文庫」を設立、のち1908(明治41)年11月、私立公開図書館として再編、開設した。頼倫の図書館事業は草創期にあった日本の図書館界に大きな刺戟を与え、1913(大正2)年、日本図書館協会初代総裁に就任。1911(明治44)年に創設した「史蹟名勝天然紀念物保存協会」の活動は今日の文化財保護運動につながる。1922(大正11)年宮内省宗秩寮総裁に就任。翌年関東大地震で被害を受けた東京帝大図書館の惨状に心を痛め、1924(大正13)年7月、南葵文庫蔵書を寄贈。文庫を閉鎖した直後に狭心症を再発、白浜での療養後、宮内省勤務を続けていたが、翌1925年5月19日死去。享年54。頼貞33歳の春であった。

頼貞が父を語った文章は多くはないが、幼い頼貞の目に映った父、長じて、ひとりの人間として語ろうとするときに見えてきた父の佇まい、どの文章も柔らかなまなざしに支えられている。

頼貞が音楽の途を選んだのは、外遊から帰った頼倫のヨーロッパ風家庭教育に負うところが大きい。幼い頃、「西洋かぶれ」になって帰った父が邦楽を排し、西洋音楽を聴かせるよう周囲に命じ、手づから帰国土産の蝋管レコードを聴かせるシーン。また小学生になってはじめて連れられていった宮内省楽部のきらびやかなオーケストラ音楽会。それらが醸し出す異国情の雰囲気は西洋音楽、西洋文化への憧れを少年の心に刻みこんだことであろう。

社会人としての父。研究心旺盛、仕事熱心だが、きわめて慎重。徳富蘇峰の評言「温良、恭謙、眞に良好の紳士」、あるいは南方熊楠の「度量寛弘、氣宇闊達」な好人物、とは異なるニュアンスで綴られる文章は、身内を語るときはこのようになるという好例。仕事熱心のあまり(頼貞の言では「執着性が強い」ということになる)「人の迷惑を顧みず、時には暁にいたるまで理事会や協議会をして人々を驚かせたものである。」と父に代って、いささか面目なげである。父のそうした性格が未熟だった日本の図書館界にあって私立図書館「南葵文庫」を設立させ、それが頼貞自身の音楽事業への途を完璧に用意したことを心底理解しながら、早すぎた死はそのせいではなかったかと父の背中によびかける。



徳川頼倫

1872-1925



徳川頼貞

1892-1954



徳川頼貞遺稿集

『頼貞随想』

徳川頼貞遺稿刊行会編

河出書房 昭和31.6

(和歌山県立図書館 A16.8/2)

【引用・参考文献】 上掲書のほか、徳川頼貞『蒼庭楽話』(私家版 1941)、徳富蘇峰『人物偶録』(民友社 昭和3.10)、南方熊楠『原本覆刻南方二書—松村任三郎宛南方熊楠原書簡』(南方熊楠顕彰会 2006)